



〈新刊紹介〉法學博士福田徳三著「社會運動と勞銀制度」

福田， 敬太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 33(2):310-311

(Issue Date)

1922-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053467>



新刊紹介

法學博士 福田徳三著

社會運動と勞銀制度

四六版・序及目次十三頁・插圖十五圖、
本文三百九十七頁、
附録百八十四頁

改造社出版 定價 三圓五十錢

本書は福田博士が三の異つた機會に試みられた講演の速記の反文に就て綿密なる校訂添削をなして一書とされたものである。従つて本書は平明且つ通達である。殊に第一篇の『社會運動の理論的根據』は博士が前に公にされた『社會政策と階級闘争』の第一部『社會政策序論』の通俗的解説として讀むべきである。第二篇の『勞働爭議の意義及種類』は右の姉妹書第二部『階級闘争と其當事者』の序説に當るものである。即ち『社會政策と階級闘争』の前半と後半との聯絡が不十分であるとの起るべき非難に對して此處に若干難する者の爲めに備へられた。第三

篇の『勞銀制度』は同じく姉妹書第二部の各論の一に當るものである。故に本書の第二篇と第三篇は『社會政策と階級闘争』の補論として讀むべきである。尙ほ附録として、我國の諸種の産業に亘つて蒐集せられた勞銀形態報告が適當なる分類を以て掲げられて居る。此は現在の日本に於ける勞銀形態の實狀を知るに最も整つた資料の一であらう。

博士の原著『社會政策と階級闘争』の讀者は恐らくは今後に研究すべく解決すべき多くの問題を課せられたことを感じたであらう。而して本書に於て博士自ら詳細なる論述と含蓄に富める比喩とに依つて其幾分を解明し讀者の蒙を啓かれたことは確かであるが、しかも尙ほ本書の讀者は己が蒙を啓かれると同時に更に深く思を潜め考を展ばすべきものあることを發見するに違ひない。

第一は國家の本質に就てである。博士は社會運動の理論的根據を説くに當つて國家對個人及

び國家對社會の關係に就て随分詳しく述べられてゐる。人類生活共同化の行程に於て國家は現實の最高階段に達して居り。同時に國家以外の共同生活もあると考へられる。斯くして das Gesellschaftliche — das Staatliche = das Soziale と成る。然るに現實の國家人格は未だ個人人格と同一でなく尙ほ擴充すべきものがあり、且つ今や國家は權力統治關係以上のより高くより遠きものを本質として居るから決して現在の狀態を以て満足すべきでない。此處に社會政策の任務が生ずると認められる。此の場合讀者の考へさせられることは『より高いより先きなる事』(本書の意義である。博士は『其のより先きなる事とは何か』と問はれたまま我々の思索に委された現實の das Staatliche が窮極の理想として進んでゐるところは何か。若し社會政策を以て現實の das Staatliche が社會運動に刺戟せられて、das Soziale を己がうちに包攝する行程と解するならば das Gesellschaftlicheこそ最後の目標

でなければならぬ。然るに此の das Gesellschaftliche は現實の國家が有する如き一の人格を有し得るであらうか。之を肯定すれば『西洋で云ふ國家主義』(本書が理論上の勝利であり、之を否定すれば社會政策の實行は其主體の自殺行為の一である。

第二に讀者の研究心を唆られるものは賃銀形態に就てである。博士が序文並に追記に斷つて居られるやうに賃銀形態に關しては本書に於て尙ほ充分に盡されてゐない。多くの挿圖と説明とに拘らず讀者は更に進んで自ら探求すべきものあることを思ふであらう。殊にハルゼー式ローン式其他の優劣比較は實際問題として綿密なる計算と研究とが必要である。幸ひ博士は今後賃銀形態に關する研究の結果を公にすることを志して居られる。我々は其日を待ち望む。同時に讀者の中にも亦本書の附録に示されたやうな事實を基礎とした研究の大いに起ることを希望して止まない。妄言多謝。(福田敬太郎)